

## 西北九州支石墓の一考察

## 甲 元 真 之

## (一)

弥生時代の日本に展開した墓制の多くは、地表に標識として小石やその他を配するものが小數みられるにせよ、本来的には地表下にある埋葬主体のみで完結した墓制となっている。これに比べ支石墓は、巨大な撐石とそれを支える支石を上部構造として地上に置き、足下に地表を掘って埋葬主体を設けるという極めて特異な構築物であることが指摘できよう。このように上部構造と下部構造が、地上と地中に分離されているために、撐石や支石が開墾その他によって二次的に移動されやすい側面をもっている。かりに撐石や支石が撤去された場合に、埋葬主体が甕棺や土塚墓であると、支石墓の下部構造としての甕棺や土塚墓かどうか識別が極めて困難である。従って日本の支石墓を検討するに際し、隣接地域の典型的な支石墓と比較対象しながら研究が進められていったことはやむをえぬところである。古く明治の初めゴーランド (W. Gowland) は日本や朝鮮の古墳を西歐の Megalithic Monument とみたてて支石墓の存在を指摘したが、鳥居龍藏氏は朝鮮での支石墓を備に検討した後に、古墳<sup>(1)</sup>以外の支石墓の究明に力を尽した。鳥居氏は大分県や宮崎県に支石墓が存在するのではないかと、その可能性を説いたが、実証されぬままに終ってしまった。支石墓に対する関心が高まりだしたのは、その後昭和四年京都大学による福岡県須玖岡本遺跡の発掘を契機としていた。すなわち同遺跡D地点で「露出せる大石の下約三尺を発掘して、甕棺と推定せらるゝものを発見し、其の内部から鑑鏡、狭鋒銅鉞、細形

銅劍、玻璃製壁等を出し、なほ甕外からも銅劍類を出したものと推定せられ<sup>3</sup>たことから、南朝鮮の支石墓との関連が注目されるに至ったのである。支石墓の概念からすると大石の存在は支石墓の十分条件ではなく、上部構造と下部構造がはっきりしなければ支石墓と判別することはできない。梅原末治氏によるその復元図も報せられているが、昭和五年の調査は、明治三二年に破壊されたものの追認調査であり、復元の妥当性は低い。今日数多くの支石墓が発掘されているが、支石墓の副葬品に青銅器物を中心とした「宝器」を埋蔵する例はなく、日本の支石墓がその系譜をひく朝鮮でもみることができない。この意味で支石墓研究の出発点になったのは、鏡山猛氏が福岡県小田遺跡、佐賀県徳須遺跡の支石墓をあげて、弥生時代墓制の一つとして指摘されたことであろう<sup>4</sup>。

戦後は福岡県志登遺跡をはじめとし、福岡、佐賀、長崎各県下での支石墓の発見が相次ぎ、昭和二十七年には佐賀県葉山尻遺跡、二八年には志登遺跡と本格的な発掘調査が行われるに及んで、ようやく具体的に支石墓を研究することができるようになった。こうした支石墓の発見と発掘を通して得られた資料をもとに、鏡山猛氏は支石墓の総括を行ったのである<sup>5</sup>。氏は日本の支石墓が南朝鮮の基盤型支石墓の系譜をひくこと、弥生時代の前期・中期にみられること、分布が北九州に限られ、その中心は銅劍、銅矛などの青銅製品を多く出土する地域にみられることなどを指摘したのであった。こうした鏡山猛氏の研究と併せて佐賀県に於ては松尾禎作氏を中心に支石墓の集成と考察が行われた<sup>6</sup>。これは昭和三一年以前に知られた支石墓関係の資料をすべて網羅し、かつ各遺跡一つ一つについて個別解説を加えたものである。この中で松尾氏は鏡山氏によって試みられた内部主体の分類を進め、土坂、石室、石棺、石圍い、甕棺と分けられること、さらに弥生後期にまで築造が続いたことなど新たに提示された。日本の支石墓は基盤型支石墓の系譜をひく点に於て、型式的には単一であり、従って内部主体による支石墓の分類は当を得ているといえよう。しかし、そうして分類された支石墓が、分布上もしくは時代上にあつて、どのような意味を有するかといったことに対しては指摘はされなかつた。また支石墓とは考えにくい遺跡の例を以つて弥生後期にまで構築が及んだとする点は、今日では受け容れ難い。

## 西北九州支石墓の一考察

昭和三〇年代の初めで、日本の支石墓研究の一応の総括はこれように行われてきたのであるが、この後、長崎県狸山支石墓、原山支石墓のような内部主体として箱式石棺をもつグループの発掘調査が行われ、かつそれが群在する点に於て從來にない特異なあり方をする支石墓の存在が注目されるようになってきた。こうした石棺を内部主体とする支石墓は、長崎県下で次々と知られるようになり、昭和四四年森貞次郎氏により、「弥生文化形成期の支石墓」として位置づけられたのである。

すなわち『韓国支石墓研究』で示された第Ⅲ類支石墓の変容したものが、日本の支石墓であり、その変容の第一段階として土塚墓をもつ支石墓が出現し、第二段階として土塚をもつ支石墓の後、背地域に箱式石棺を内部主体とする支石墓が成立したのであり、それらは弥生文化形成期というべき縄文時代晩期末に構築されたものと想定されたのである。こうした支石墓に関する諸研究をまとめて、昭和五〇年に下條信行氏は次のような総括を行っている。

一、縄文時代末から弥生時代初頭にかけて唐津平野では土塚墓、長崎県下では石棺墓を内部主体とする支石墓が形成された。

二、弥生時代前期末から中期初頭にかけて分布が広がり、かつ成人甕棺を内部主体とするものが出現する。

三、弥生時代中期まで支石墓は存続し、小共同体的グループを形成していたが、例外的に後期初頭に下るものもある。

支石墓の多くは数基群在するのが通例であるが、特異なものとして須玖岡本D地点や、佐賀県宇木汲田遺跡のような大石の存在をもとりあげている。

このように支石墓に対しては、漠然としたまとまりをもって把握する段階まできているのではあるが、支石墓の概念が、筆者によって異なるためにトータルな理解がなされていないことも事実であり、さらに論点となった個々の遺跡や遺物の取りあつかいに於ても、説得性が充分でないことがある。それは朝鮮支石墓の最終段階にあるとする基盤型支石墓の系

譜をひくものとしながら、朝鮮の碁盤型支石墓よりは、二、三百年も日本の支石墓の年代を早く想定したりする点にも端的にみられよう。ここではこれまで報告された支石墓を集成分析しなおして、改めて日本に於ける支石墓のあり方をみてゆくことにする。日本の支石墓が朝鮮の碁盤型支石墓の系譜をひく点については、ほぼ疑う余地はないとされているのであるが、改めて朝鮮の支石墓の変遷をたどることも必要であろう。

(二)

朝鮮に二つの異った型式の支石墓が存在することを最初に指摘したのは、支石墓研究の開拓者である鳥居龍蔵氏であった。彼は一九一一年（大正五年）に朝鮮の遺跡踏査を行い、碁盤型支石墓と卓子型支石墓という二型式の支石墓が存在し、前者が古式の支石墓であることを想定したのである。ところが昭和の一〇年代に入り、大邱大鳳洞支石墓群の発掘調査を経た後に、北方式（＝卓子型）支石墓が古く、南方式（＝碁盤型）支石墓が新しいという考えがさほど根拠なしに主張されはじめ<sup>10</sup>てきた。戦後三上次男氏は北方式と碁盤型支石墓以外のものをまとめて南方式支石墓として、今日一般化している朝鮮支石墓の三分類化を行<sup>11</sup>った。この三上氏の分類法は様々に形を変えながらも、朝鮮の研究者に受け継がれており、型式変遷の面でも北方式↓南方式↓碁盤型という展開の過程は一般に受け容れられている。ところが戦後の支石墓発掘調査では、南方式支石墓が平安南道の北端で発見され、また北方式支石墓が南朝鮮にも分布することが判明した。このことからまず北方式、南方式という名称が事実には合わないことが知られたし、南方式と一括された支石墓にも変差が多くあつて構造的には単純でないことが解つてきた。従来の支石墓の分類法は形態論であつて、副葬品の分析とか、構造論から導きだされたものではなく、その欠点が事実をもつて示されたのである。支石墓を特徴づけるのは巨大な撐石であり、その撐石の重みを受ける技法の変化によって型式化し、変遷をたどると、伴出する副葬品の編年と符合し、支石墓の展開を明確に跡づけることができる<sup>12</sup>。

西北九州支石墓の一考察

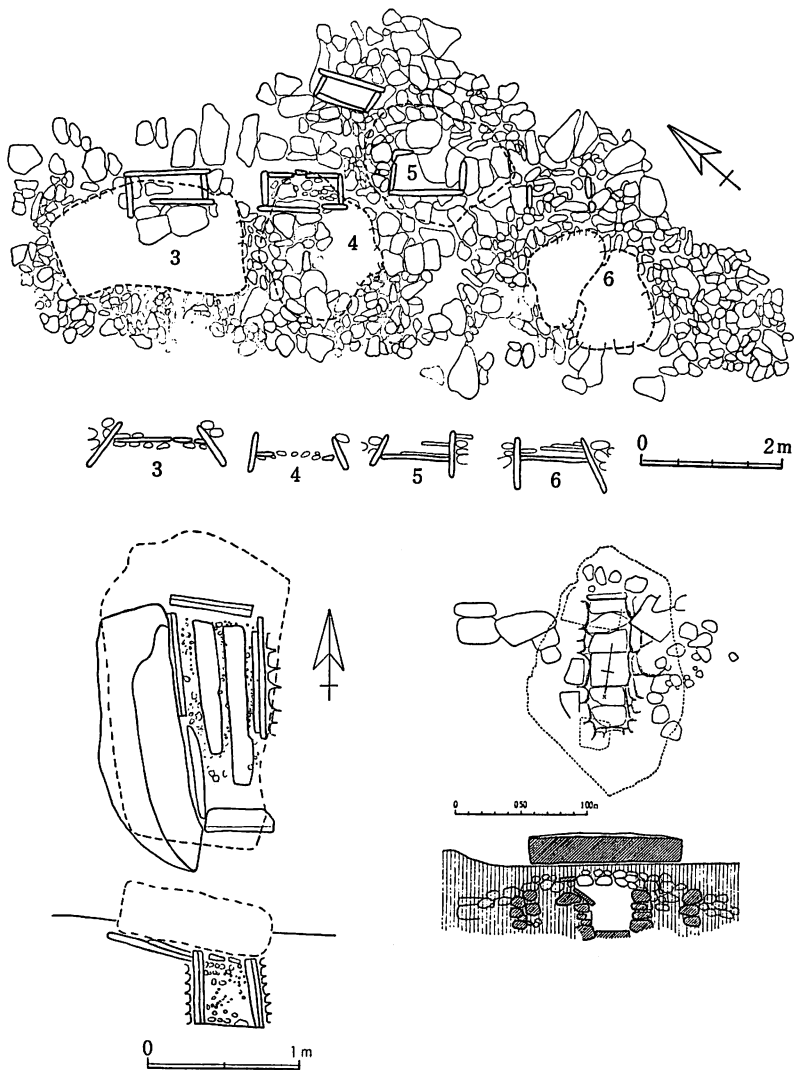
それによると、従来南方式支石墓と一括されたものの中に、卓子型や碁盤型支石墓の祖形となるものが存在し、卓子型にしる碁盤型にしるそれらはいずれも支石墓の最終段階のものであることが判明したのである。そのうち卓子型支石墓への展開過程は、朝鮮の学者も主張するところとなった。

日本の支石墓を考える上で関連するのは、碁盤型支石墓の創出過程である。この系列の中で最も古い型式のものは、黄海北道黄州郡沈村里天真洞、棘城洞、キン洞各支石墓群にみられるものと、忠清北道提川郡黄石里第13号墓であり、沈村里A型と仮称した類型である。この型式の支石墓は、埋葬主体として箱式石棺墓を設けるが、撐石の重みを石棺四側の各上面で受けるために、その重量に耐えかねて側石が壊れるか、揚げ底状をなすように沈下している。二番目の型式のものは沈村里中学校運動場傍の二号墓や平安南道竜淵郡石橋里支石墓、黄石里C号墓などにみるもので、沈村里C型とした型式である。これは埋葬主体は箱式石棺墓であるが、箱式石棺墓の四周に板石を小口積にして石室をつくり、石室の上面や石棺側石の上面で撐石の重量を支えるものであり、撐石の重量の支え方において、沈村里A型よりも進歩した型式である。大鳳洞型式とする第三番目の型式支石墓は、埋葬主体は石室墓や石棺墓、あるいは木棺墓であったりしても、埋葬主体の四周には切石をめぐらし、かつ撐石と埋葬主体の間には「積石塚と合体した支石墓」と称される如く、多くの小石を配するものである。従って撐石の重みは直接には埋葬主体に影響を与えない。谷安里型と称するものは、埋葬主体は大鳳洞と変りないが、石棺や石室を覆う小石群よりも上位、当時の地表に数個の支石を配し、この支石の上に撐石を載せるものである。この型式の支石墓は、従って撐石の重量はまったく埋葬主体に関係しない(以上第1図)。このように撐石を支える技法の面から支石墓をみると、

沈村里A型

←

沈村里C型



第1図. 沈村里A型(上), 沈村里C型(下左), 大鳳洞型(下右)の支石墓

## 西北九州支石墓の一考察

## 大鳳洞型



## 谷安里型

と撐石の重量を軽減する方向に変化していったことが窺えるのである。

支石墓の構造に於けるこうした変遷は、伴出する副葬品によっても確かめうる。無文土器の編年からすると、沈村里A型↓沈村里C型↓谷安里型と順序をたどることができ、さらに磨製石剣の編年からは、沈村里A型↓沈村里C型↓大鳳洞型↓谷安里型と展開する。

このように支石墓の構造変化は、伴出する副葬品の編年と矛盾するところがないのである。

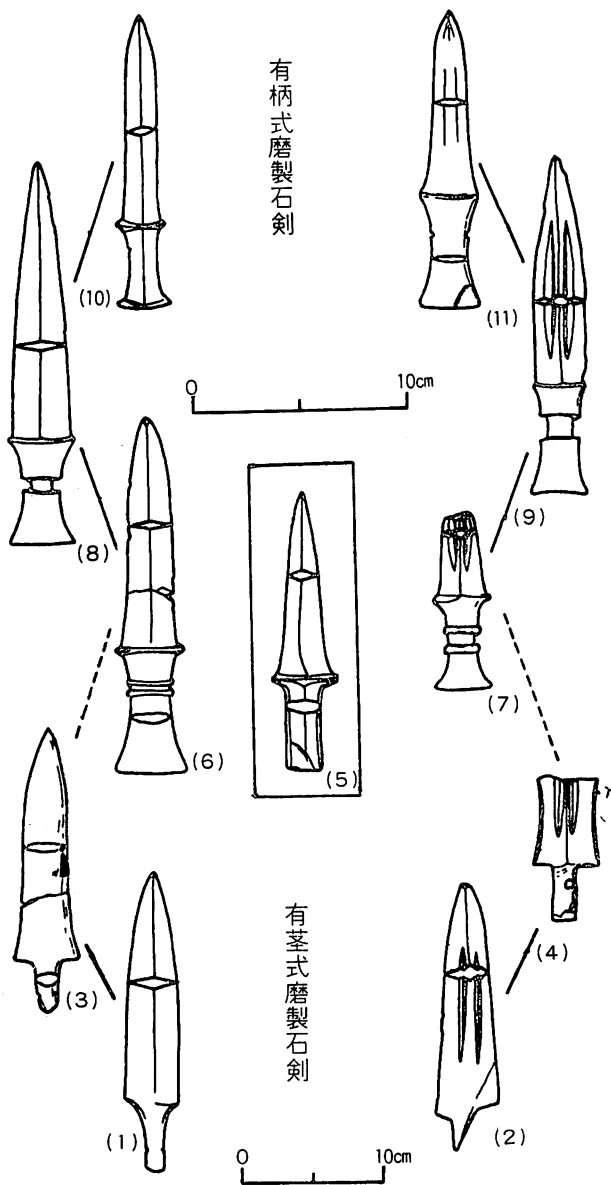
ところで、こうした変化発展をたどる支石墓の年代はどのようになるであろうか。最古式の支石墓である沈村里A型には、古式のコマ型土器、古式の柳葉型石鏃、無樋有茎式石剣が伴う。このうち磨製石剣は関が反り上る型式のものであり、中国西周の有茎式銅剣を模倣したものであることが知られるので、紀元前五世紀以前と考えられよう。一方コマ型土器の年代から紀元前七、六世紀以降と比定されることから、ほぼその構築年代をおさえることができる。大鳳洞型の支石墓には無樋二段柄式の有柄石剣と、無樋一段柄式の有柄石剣が伴出する。有柄石剣は有光教一氏の説かれるように細形銅剣を模したものであって、今日細形銅剣の朝鮮での出現は紀元前四世紀に考えられているから、それ以後の時期に比定しうる。ところで、無樋二段柄式の有柄石剣は、有柄式石剣の中で最古式ではなく、有柄籜付石剣の形式化したものであることから(第2図)、細形銅剣の出現期にまでその年代を溯上させることはできない<sup>13)</sup>。早くても紀元前三世紀以降に考えざるをえないのである。谷安里型の支石墓から出土する磨製石剣は、最も形式化の進んだものであり、それ自体で年代を把えることはできない。谷安里型支石墓で出土する丹塗土器は金海式灰陶以前の型式の土器と考えられる点から、遅く

とも紀元前後以前と比定しうる。こうした年代観に、沈村里C型から北朝鮮で発展した黒房里型支石墓が、紀元前一世紀の前半以前と年代が想定できることなどを加味すると、朝鮮での支石墓の変遷は次のようになる。

沈村里A型 紀元前七〜五世紀

沈村里C型 紀元前四〜三世紀

西北九州支石墓の一考察



第2図. 朝鮮磨製石剣の変遷図



大鳳洞型 紀元前二世紀

谷安里型 紀元前二〜一世紀

## (三)

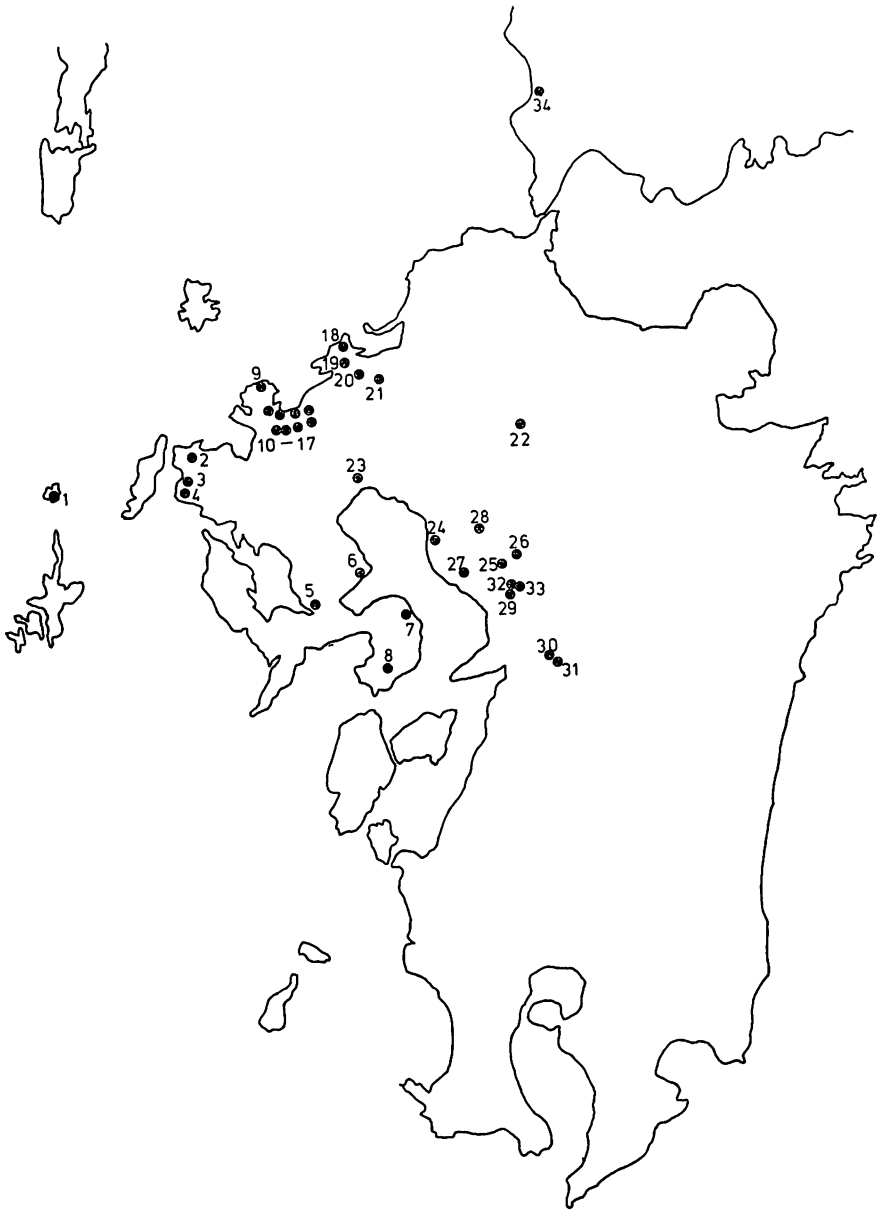
日本でみることのできる支石墓は、いずれも支石をもつ支石墓であるといわれており、その点では朝鮮の谷安里型支石墓の流れの中にあることが知られよう。さらに、型式学的には単一であると考えられていることから、埋葬主体による細分が意味をもってくるようになる。埋葬主体による区分はこれまで鏡山<sup>(1)</sup>猛氏や松尾禎<sup>(15)</sup>氏によって試みられてきた。そうした区別を参照しながら、これまで知られた支石墓を類別したものが次の第一表である。

なお、この第一表に関しては、必ずしもすべての「支石墓」を含んでいるとは限らない。前にも述べたように、日本の支石墓についての定義や概念が研究者内で一致しておらず、調査者やそれをまとめた人によって内容に変差があるために一定の標準でまとめた。また支石墓の構造自体に、移動されたり破損されやすい側面があるために、支石墓かどうかの判断がすこぶる困難なものが多い、さらに支石墓と呼ばれるものの調査例でも、その報告書が公刊されていない遺跡が多く、その構造を含めた実体を把握することがむずかしい。

以上のようなことから、この第一表に掲げた遺跡も、今後変ることが十分に予想されるのであり、集計はあくまでも昭和五十二年十月現在、私の知りえたものである。

従来、支石墓と称されたものの中には、須玖岡本D地点の大石や、志賀島の「金印」出土遺構も支石墓に含めて論議されることが多いが、日本支石墓の性格として、青銅器類や権力を象徴するような遺物を伴出することはない点や、それらは考古学上の第一次資料ではないために、ここでは除外した。同様に大石のみの存在で支石墓とした例も、これには容れない。

西北九州支石墓の一考察



第3図. 支石墓分布図 (遺跡番号は一覧表と一致)

第一表 支石墓一覽表

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	遺跡名	所在地	基数	埋葬主体	副葬品・年代	文献
割石	葉山尻	岸高	森田	瀬戸口	さこがしら	徳須恵	大友	原山	景華園	井崎	風観岳	狸山	大野台	里田原	松原	長崎県北松浦郡宇久町平郷	2基	土壇	貝輪 貝製垂飾品 貝製白玉	①	
"	"	"	"	"	"	"	佐賀県東松浦郡呼子町	"	"	"	"	"	"	"	"	田平町	現存3基	箱式石棺		②	
"	鏡柏崎	"	葉山尻	"	"	唐津市鏡宇木東宇木	北波多村	南高来郡北有馬町	島原市三会町	北高来郡小長井町	諫早市大渡野町	"	佐々町松瀬免	鹿町町深江免	"	7基	"	"	"	③	
6基	5基	6基	16基	14基	13基	10基数	1基	約100基	1基	1基	20+a基	7基	8基	8基	2基	"	"	"	"	④	
土壇	土壇 甕棺	不	土壇	箱式・土壇・石棺	土壇・箱式石棺	甕棺	土壇	土壇・甕棺	甕棺	箱式石棺	"	"	"	"	"	夜白式土器	"	"	磷礫製大珠	"	⑤
土器	板付式土器、石鏃		弥生前期土器	夜白・板付式土器				夜白式土器・土偶魚形土製品		板付式土器											⑥
⑬	⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①						

西北九州支石墓の一考察

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
中ノ浜	永田	中原	八ッ割	麻生原	塔ノ木	嘘の	年ノ神	藤尾	古閑山	南小路	羽山台	朝田	四箇	石ヶ崎	志登	小田	五反田
山口県豊浦郡豊浦町浜	"	"	"	"	"	"	"	"	熊本県菊池郡旭志村	佐賀県佐賀市大和町尼寺	"	"	"	"	"	福岡県糸島郡北崎	"
1基	?	?	12基	2基	4基	2基	9+ $\alpha$ 基	5基		1基	1基	1基	1基	10基	2基	5基	
"	"	土	"	不	土	不	"	配石土	不	甕	甕	不	石	土	甕	土	土
		坛		明	坛	明		坛	明	棺	棺	明	室	坛	室	室	坛
								弥生中期		弥生中期	弥生中期		弥生中期土器管玉	磨製石鏃			弥生前期土器
34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17

## 支石墓集成の文献と付記

- A、松尾祐作『北九州支石墓の研究』昭和三二年 佐賀。  
 B、文化財保護委員会『志登支石墓群』昭和三二年 東京。  
 C、森貞次郎『日本における初期支石墓』（『金載元博士回甲記念論集』）、一九六九年 ソウル。
- ① 小田富士雄「五島列島の弥生文化―総説篇―」（『人類学考古学研究報告』第2号）、昭和四五年、長崎。二基のうち一基は追認調査である。
  - ② 長崎県教育委員会『里田原遺跡』昭和五一年、長崎。
  - ③ 大野台遺跡調査団「大野台遺跡―縄文晩期墳墓群の調査」（『古文化談叢』第一集 昭和四九年、北九州。文献C。
  - ④ 諫早市教育委員会『風鶴岳支石墓群調査報告』昭和五一年、諫早。本報告では支石墓かどうか不確かなものとして一五基あることが記されている。
  - ⑤ 正林護「小長井町の先史・古代」（『小長井町郷土誌』）、昭和五一年、長崎県小長井。
  - ⑥ 古田正隆氏の御教示による。
  - ⑦ 文献A、B、C及び古田正隆『重要遺跡の発見から崩壊までの記録―縄文晩期原山埋葬遺跡―』昭和四九年、島原。
  - ⑧ 木下元治「佐賀県・大友弥生遺跡」（『九州考古学』第三九・四〇）、昭和四五年、福岡。
  - ⑨ 文献A。
  - ⑩ 文献C及び松岡史「第二篇古代」（『唐津市史』）昭和三七年、唐津。なお松岡氏によれば支石墓基数は六基である。
  - ⑪ 文献C及び松岡前掲論文。
  - ⑫ 文献C及び松岡前掲論文。なお松岡氏によれば支石墓の基数は一五基である。
  - ⑬ 文献C及び松岡前掲論文。
  - ⑭ 文献A、B、C。
  - ⑮ 文献A。

- ①7 文献A、B。
- ①8 文献B及び、鏡山猛「原始箱式棺の姿想」(『九州考古学論攻』昭和四七年、東京による)。
- ①9 文献B。
- ②0 文献A、B及び、原田大六「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」(『考古学雑誌』第三八卷第四号)、昭和二七年、東京。
- ②1 福岡市教育委員会『福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書』(1)、昭和五二年、福岡。
- ②2 文献B。
- ②3 大牟田市教育委員会『羽山台遺跡—大牟田市所在羽山台C地点遺跡の調査』昭和五〇年、大牟田。
- ②4 ⑤の註による。
- ②5 坂本経堯『藤尾支石墓群』昭和三四年、熊本県旭志。
- ②6 ②5と同じ。
- ②7 文献A及び田添夏喜『年ノ神遺跡調査報告』、昭和四四年、熊本県岱明。
- ②8 玉名女子高校社会部「塔ノ本遺跡発掘調査」部報第一七集、昭和四七年、玉名。
- ③0 緒方勉『沈目立山遺跡』昭和五二年、熊本。
- ③1 緒方前掲書。
- ③2 緒方氏の御教示による。
- ③3 緒方氏の御教示による。
- ③4 国分直一他『中の浜遺跡発掘調査概報』昭和四五年、東京。

## (四)

支石墓の埋葬主体について鏡山猛氏は、甕棺、石棺、石室、石囲いの五形態があることを指摘し、松尾禎作氏もこれに賛同しつつ、他に土壇や石囲いの底部に敷石をもつタイプの存することを例示している。うち石囲いについては、「土壇内に五、六箇の塊石を円とか楕円とか長方形等の形に並べて、中に屍体を置いたらしい構造施設を持つ」ものと定義されている。ここで言う石囲いの類型の具体的な例としてあげられる志登支石墓のありかたをみると、石囲いとする石が土壇と密接に関連するものではなく、支石と埋葬主体の間であって、埋葬主体を保護するものであり、南朝鮮の支石墓の下部構造と似た施設と考えることができる。従って本来的には土壇であると推定できよう。縄文晩期と弥生前期の支石墓を分析した森貞次郎氏は、同様の観点から、支石墓の埋葬主体を次のように細分する。<sup>(17)</sup>

- (1) 長方形粗製箱式石棺
- (2) 方形に近い粗製箱式石棺
- (3) 楕円形石囲み墓
- (4) 円形あるいは長楕円形土壇墓
- (5) 明確な支石をもたない石囲み墓
- (6) 支石がなく石棺のあるもの

このうち(3)と(5)については、代表例としていずれも原山遺跡の支石墓があげられているが、型式上では各々一例しか示されておらず、しかもその具体例は、「六枚の側石で囲った」とか、「三側石をもって構成されるコ字形の石囲み」と表現されているところから、松尾氏の言われる石囲み墓とは異り、むしろ志登支石墓のよつな形態に近く、その壊れた形とも推測できよう。ここで重要なのは、原山遺跡に支石の無い支石墓と支石を有する支石墓の二つの型式がある点であり、

風觀岳遺跡で二者が併存することが確認されたところから、別の観点よりの分析が必要である。(6)の支石がなく石棺があるタイプとして例示されるものは、小田支石墓や石ヶ崎支石墓であるが、前者については鏡山氏が聞き書きにより作図された資料が基になっていて、他の類似した遺構の例がない時点では、むしろ石ヶ崎支石墓のあり方から、石室墓として分類するのが適切であろう。

こうした先学の類別に習い、今回は支石墓の埋葬主体を次のように分類することにしよう。

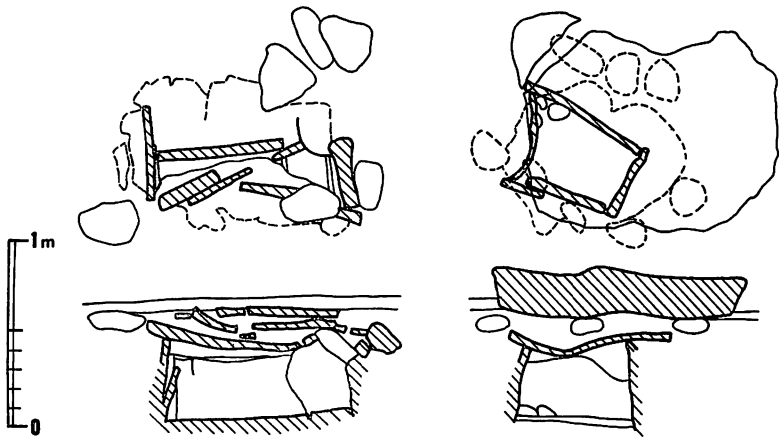
- (1) 箱式石棺
- (2) 土塚
- (3) 甕棺
- (4) 石室
- (5) 配石土塚

(1) 箱式石棺

数枚の板石を正方形もしくは長方形に組んで側壁とし、何枚かの板石で底部や蓋となしたものを棺とする。長崎県大野台遺跡<sup>(19)</sup>や狸山遺跡<sup>(20)</sup>にみられるもので、今、狸山遺跡5号墓を例にとって詳説しよう。

5号支石墓(第4図)の撐石は長さ $1.3\text{ m}$ 、幅 $1\text{ m}$ 、厚さ $0.2\text{ m}$ の方形に近い扁平な花崗岩で、撐石の下には8個の支石があり、うち6個は撐石の内側深くにある。埋葬主体は平面が台形になる箱式石棺で、5枚の板石で構成され、蓋として扁平な安山岩が一枚覆われている。石棺の内法は $0.6\text{ m} \times 0.4\text{ m} \times 0.4\text{ m}$ を測り、内部に遺物はなく黄褐色土が充満していた。伴出遺物としては、支石にはさまれて夜臼式土器が検出されている。5号墓では石棺の蓋石と支石の間には特別な処置はみられないが、6号墓では扁平な板石を数枚重ねて置くことがあって、朝鮮の碁盤型支石墓との共通





第4図. 狸山第5 (右), 6号支石墓

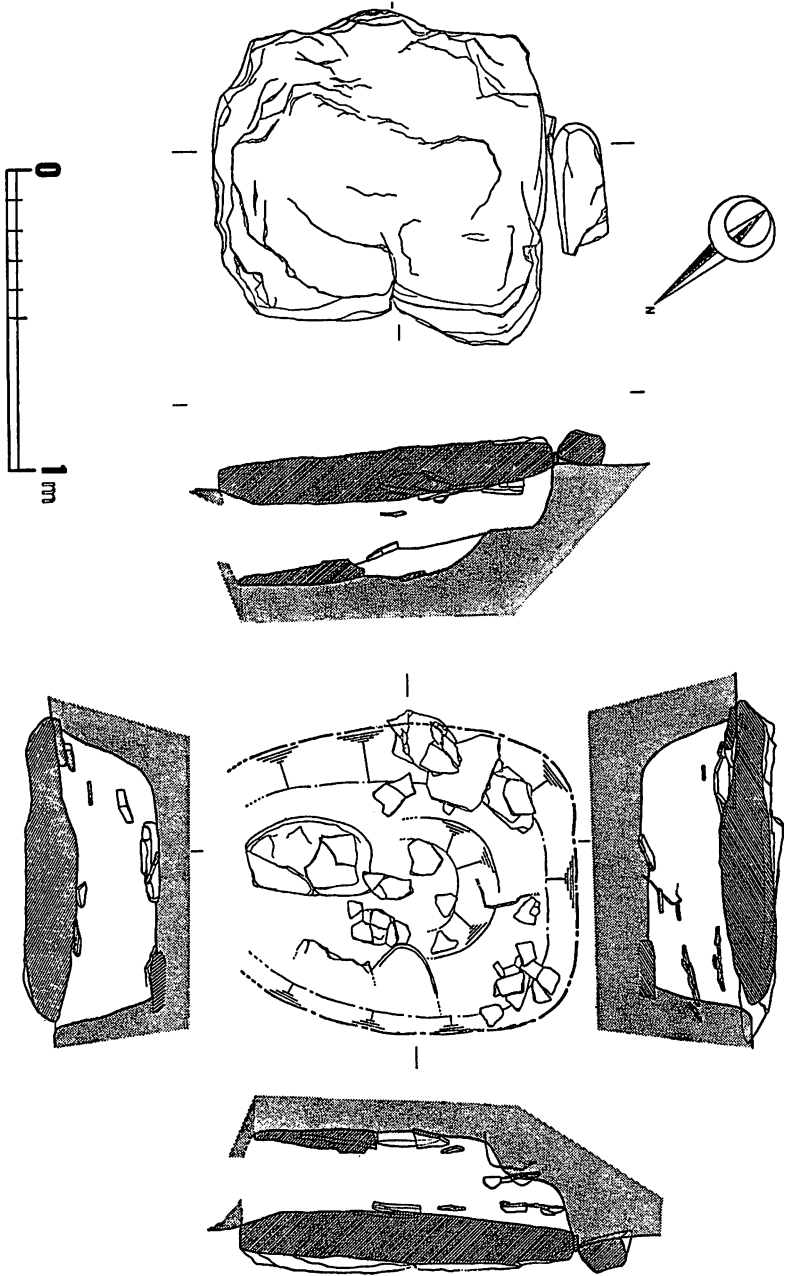
性をみせている。

大野台支石墓では撐石はすでに失われているが、石棺の蓋石上に狸山6号墓と同様に板石や塊石が配されていて、支石墓の下部構造であったことが知られるのである。この他に箱式石棺を埋葬主体とする支石墓は、里田原遺跡<sup>(21)</sup>、風観岳遺跡<sup>(22)</sup>、井崎遺跡<sup>(23)</sup>、原山遺跡<sup>(23)</sup>など長崎県下の各支石墓にみることででき、佐賀県ではさががしら<sup>(25)</sup>、瀬戸口各遺跡<sup>(26)</sup>の支石墓群中にある。こうした主体部の石棺は、弥生時代の箱式石棺墓と比べて、著しく小形である点特徴で、大野台遺跡の場合、最大の石棺で長さ0・96m、幅0・49m、最小のもので長さ0・49m、幅0・38mを測るにすぎない。こうした石棺の狭隘性は、しばしば縄文時代の屈葬と対比されて考えられている。

(2) 土塚

円形もしくは長楕円形の平面形をし、摺鉢状の底部をなす素掘りの塚である。土塚の土部もかくはその週辺には小板石を配置することも多い。風観岳第3号支石墓はその標識的なものである。この支石墓は台形状をなす扁平な玄武岩を撐石とし、4個の塊石を支石とするもので、支石と埋葬主体の間には3〜4

第5図. 風鶴岡支石墓



## 西北九州支石墓の一考察

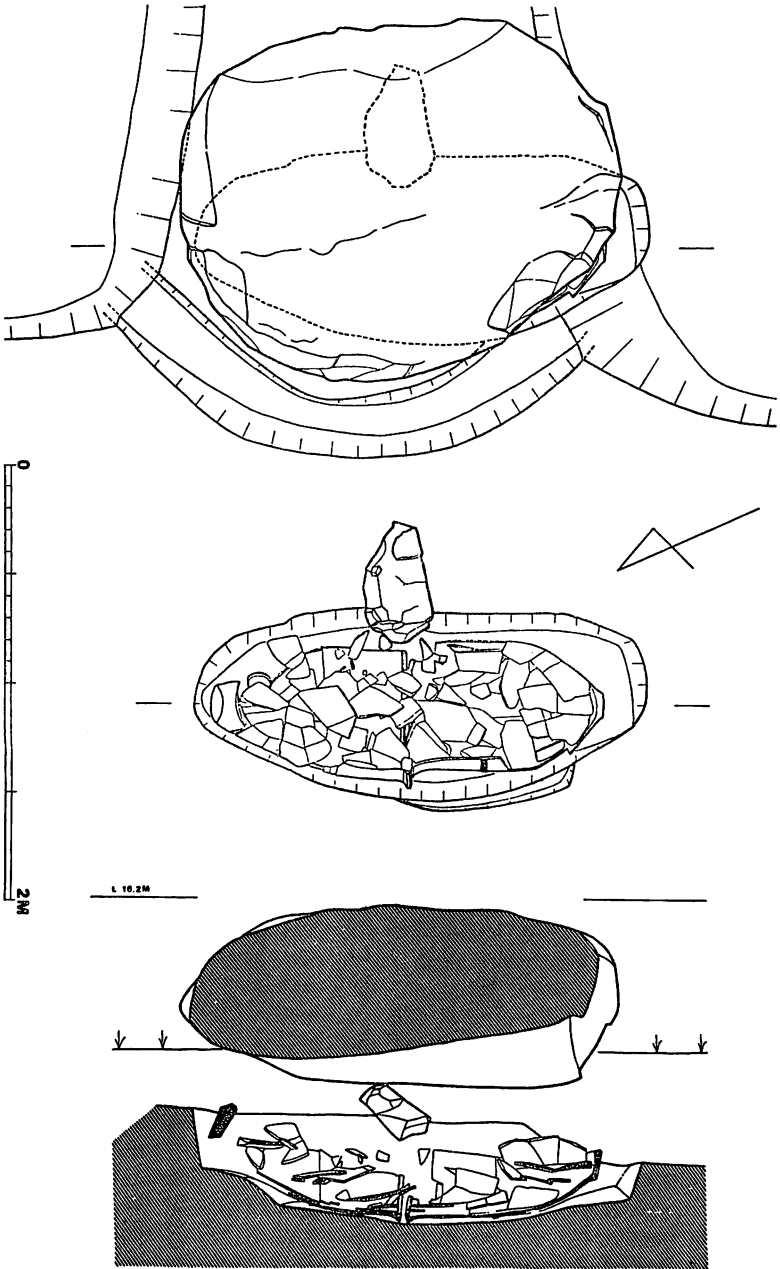
枚の扁平な粘板岩が置かれていた。土塚は南北に長軸をとる長さ1・4 m、幅0・3 \textasciitilde 0・4 m、深さ0・2 \textasciitilde 0・3 mの長方形を呈するものである。土塚の北壁部分は攪乱を受けていたが、その輪郭を把握することはできたという。副葬品はなにもなかった。風観岳の第8号支石墓は(第5図)、3号と同様のものであるが、土塚は大きくてかつ円形に近い。また土塚内に落込んだ板石の状態から木蓋の存在を推定されており、この種の土塚は木棺もしくは木蓋があったことが考えられるようになってきた。但し8号墓と3号墓では支石のあるなしと構造上二分されるため、支石のない支石墓の土塚墓に木棺が伴う可能性もみられる。

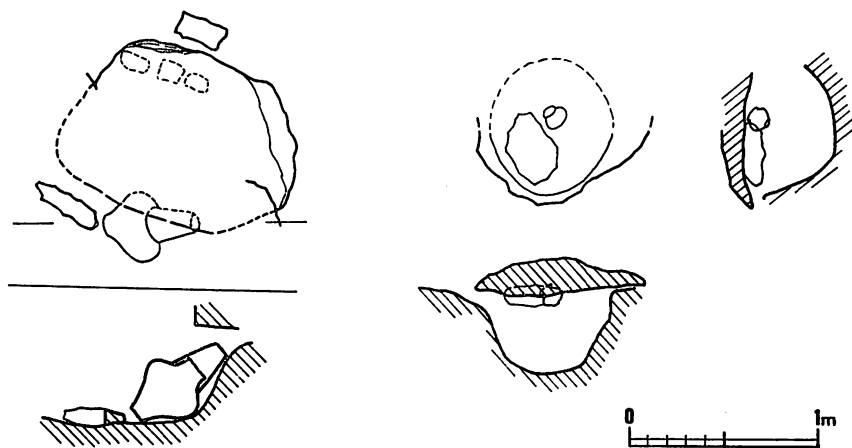
## (3) 甕棺

甕棺墓にみられるような合口甕棺や単棺を埋葬主体としたものであり、一部には甕と壺の組合せをもったものもある。羽山台C地点<sup>(27)</sup>の支石墓は(第6図)、甕棺墓や土塚墓などが群在する墓地の中に一基だけみられるもので、長さ2 m、幅0・7 m、厚さ0・7 mの大きな亀の甲型をした花崗岩製の撐石をもち、支石は1個、土塚の一長辺に接するように配されている。土塚は長さが2 m弱、幅0・87 m、深さ0・48 mを測る長方形の大きなもので、坵底は二段掘となっている。土塚内には合口甕棺が北側に7°あがる傾斜をもって埋葬され、甕の上半は壊れていたという。副葬品は何もなかったが甕棺の型式から中期初頭に考えられる。甕棺はこのように1基だけというのが通例であるが、葉山尻第1号支石墓<sup>(28)</sup>のように、2個の直立倒置単棺、3個の合口甕棺、1個の水平単棺と6個の埋葬施設をもつような特異な例がある。この他に五反田遺跡の第4号支石墓<sup>(29)</sup>のように、夜臼式の甕と板付I式の影響を受けたと思われる壺の組合せの埋葬主体をもつものがあり(第7図)、その類例として原山遺跡D群第1号<sup>(30)</sup>があげられる。

## (4) 石室

第6図. 羽山台遺跡の支石墓





第7図. 五反田支石墓

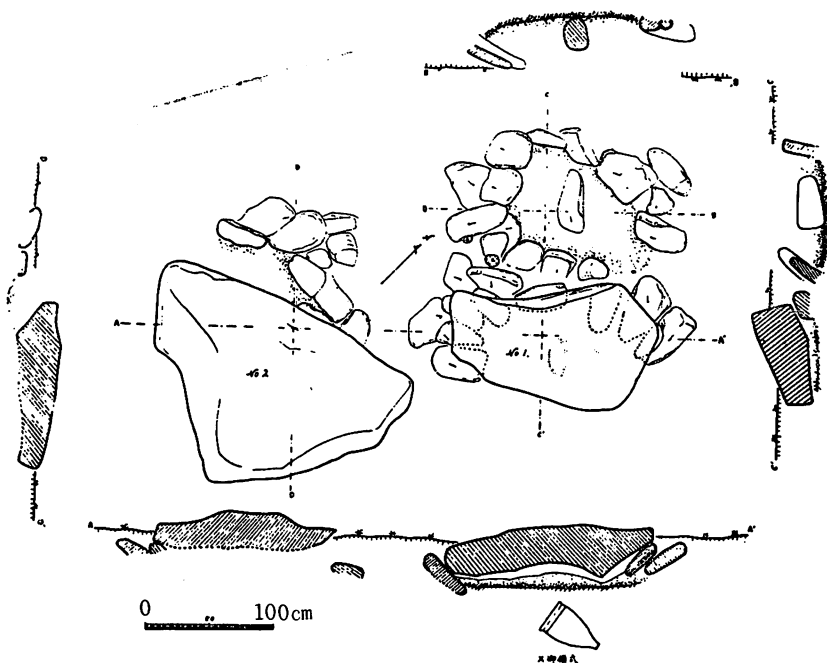
石ヶ崎<sup>(31)</sup>と小田支石墓<sup>(32)</sup>の2例があるにすぎない。石ヶ崎の支石墓は大きな撐石の下に、河原石などで粗雑な箱式石棺状に石室を構えたものである。また小田支石墓の例は、鏡山猛氏によって推定復元がなされているが、それによれば、7個の石を東西1・67m、南北1・2mの矩形に配して石室状のものを構築していたという。このように二例とも他にみられぬ特異な構造であり、しかも両方とも追認調査であるため、本来の埋葬主体のはっきりした形は不明である。

(5) 配石土塚

これは従来石囲み墓などと称されていたものとは異り、河原石や板石で土塚に明確な縁どりをもつもので、代表的な遺跡として藤尾支石墓群(第8図)をあげることができよう。<sup>(33)</sup>その第1号支石墓は大小15個の川原石で側壁を囲い、そのプランは1m×0・7mの楕円形で、床面は舟底状に中凹みとなる土塚で構成された埋葬主体をなしている。藤尾支石墓群ではこうした構造のものが一般的であり、他に年ノ神支石墓もこれにあたるらしい。

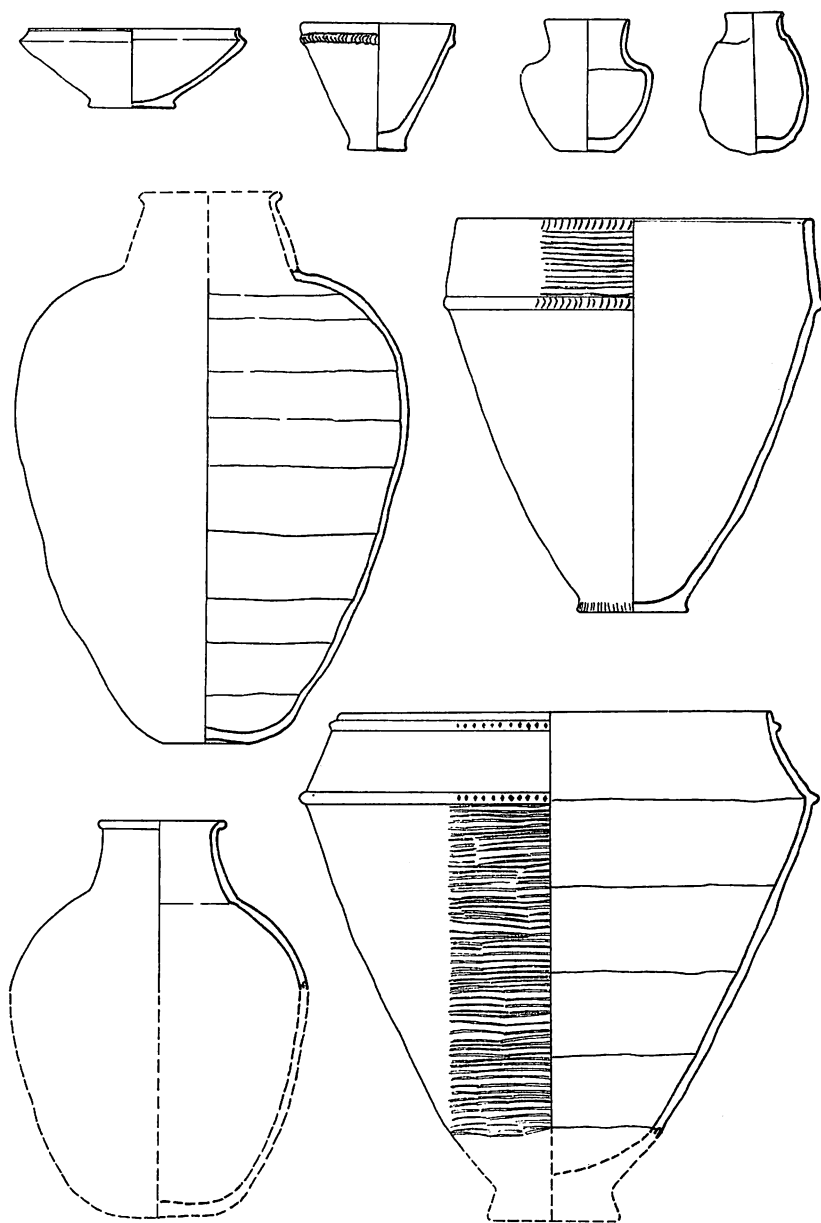
(五)

支石墓の埋葬主体としては右にみたように五類型がある。それらの



第9図. 藤尾支石墓

時期と分布をみてゆく前に、支石のない支石墓の問題について考えてゆこう。支石のない支石墓の存在は、先にもみたように森貞次郎氏が、原山遺跡D群1号を例示して指摘されたことがあるが、その後風観岳支石墓の調査に於いて、支石のない支石墓が碁盤型支石墓に混って数基存在することが分った。すなわちこの遺跡で明確に支石墓とされる20基のうち、支石の有無が判定できる10基中6基は支石のない型式である。しかも埋葬主体は箱式石棺と土坑の両者があり、その比率は5対1となる。唐津平野から福岡県西北部にかけてはみることができないが、里田原遺跡の埋葬主体が箱式石棺のものは、支石をもたない。支石のない支石墓の伴出品からみると、風観岳第7号墓では夜臼式土器の壺、原山遺跡D群第1号墓では夜臼式の壺と甕（第9図）がそれぞれ出土している。このうち風観岳のものは板付I式土器と並行する時期の夜臼式土器と思われる、原山のそれは弥生時代の初頭の頃の構築と推定されよう。



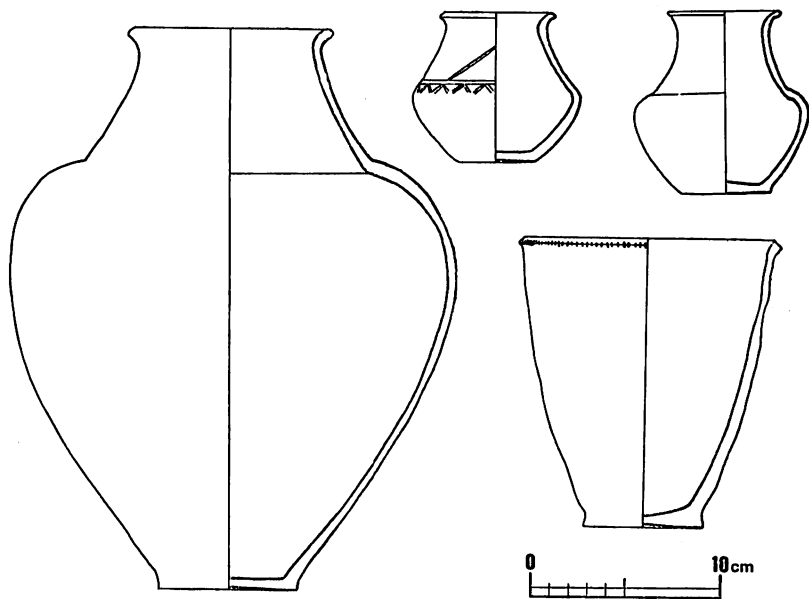
第9図. 原山支石墓出土土器 (縮尺 $\frac{1}{6}$ )

基盤型支石墓のうち箱式石棺で副葬品を伴う遺跡は、大野台遺跡で夜臼式土器、狸山遺跡で夜臼式土器と大珠、風観岳遺跡で夜臼式土器、原山遺跡で夜臼式土器、井崎遺跡で板付Ⅱ式土器などであり、弥生時代前期の初めから終り頃まで継続して築かれていたことが分る。次に土塚を埋葬主体とするものでは、五反田遺跡第3号墓で板付Ⅰ式壺、割石遺跡<sup>34</sup>第2号墓で土器、葉山尻遺跡第5号墓で板付式の壺、また同第1号支石墓側から板付式の壺、原山遺跡で夜臼式の甕と土偶、魚形土製品などが伴出している。<sup>(45)</sup> これなどからみると土塚を主体とする支石墓は弥生時代の前期に比定できる。このことは葉山尻遺跡で弥生中期の甕棺墓に切断されている土塚をもつ支石墓があることや、森田遺跡で支石墓の周辺から弥生前期の土器が採集されていることと<sup>(36)</sup> 時期的な違いはない。甕棺をもつ支石墓は、弥生時代の前期末から中期初頭の時期に限られるが、五反田遺跡第4号墓や原山遺跡D群第1号墓のような例をどう取扱うか問題がある。

すなわち原山遺跡の例は夜臼式土器の小児棺と推定され、五反田遺跡では夜臼式の甕と板付式の影響を受けた壺がセツトとなって棺を形成している(第10図)。これら二者はいずれも前期の初頭に位置づけられるものであり、<sup>(37)</sup> 甕棺墓のような大形甕を使用する支石墓とは、一時期空白期間がある。また五反田遺跡や原山遺跡のものには壺棺であることはそれと異なる。一般に甕棺を埋葬主体とするものは、支石墓分布のはずれ(景華園遺跡、<sup>(38)</sup> 朝田遺跡、<sup>(39)</sup> 羽山台遺跡等)にあって、他の墓制と共同墓地を構成する傾向にあるか、あるいは支石墓構築の終り頃の所産(葉山尻遺跡、徳須恵遺跡等)かであつて、原山遺跡や五反田遺跡のものとは性格を異にするものであろう。配石土塚の例は、今のところ藤尾遺跡と年ノ神遺跡で確認されているだけである。しかも両遺跡とも伴出品が無いために明確な時期は不明である。

藤尾支石墓の場合、従来は支石墓の周辺にある甕棺が黒髪式のものとして認定され、弥生後期に下る例としてしばしばとり上げられてきた。しかし藤尾遺跡出土の甕棺は、一般に「黒髪式」といわれる型式と異り、むしろ須玖式の甕棺と共通する点が多いことから、支石墓がその周辺の甕棺の形式時期とさほどかけ離れた時期ではないとすれば、弥生時代中期の中頃のものであると推定しうるのであろう。





第10図 五反田支石墓出土土器

(六)

これまでみたように、夜臼式Ⅱ板付Ⅰ式段階の支石墓は、支石のないいわゆる大鳳洞型のもと、谷安里型の両型式がある。しかし日本に於いては、朝鮮で見られるように、構造上の差がそのまま時間的差としてあらわれていないので、土塚と箱式石棺の両種を比較してみよう。支石墓の埋葬主体として土塚をもつ類が箱式石棺をもつものよりも広範囲に分布をしている。また箱式石棺を埋葬主体とする支石墓は、群在するが、その群中には土塚をもつ支石墓もみられる。このことから箱式石棺よりも土塚をもつ類がやや先行して営まれたと考えられよう。さらに風観岳遺跡の土塚をもつ支石墓のように、それが木棺土塚であった可能性のあることから、木棺の部分を石に移したのが箱式石棺であることが考えられる。従って森貞次郎氏が土塚の型式が古く、第二段階としてその後背地域に箱式棺が行われたと指摘されたのは、<sup>(40)</sup>今日の支石墓のありかたからすると妥当であろう。ただし、こうした日本に

於ける支石墓の出現に關して、日本には碁盤型だけではなく、支石をもたない大鳳洞型の支石墓が存在することから、南方第Ⅲ類<sup>(4)</sup>ではなく、大鳳洞型で埋葬主体が木棺土塚である支石墓が、日本支石墓の碁盤となった可能性が最も高いと考えられよう。

弥生時代の墓制全体からみてくと、唐津平野から福岡平野にかけての甕棺卓越地帯を狭んで、東は福岡東部、大分県、山口県と箱式石棺墓地帯があり、西に支石墓地帯がみられるというあり方をみせている。そして支石墓と甕棺の接触地帯に於て、支石墓の埋葬主体として甕棺が使用されたとみることができよう。しかし朝鮮でのあり方のように、支石墓は本来は群在して墓域を構成するのに、甕棺を埋葬主体とする支石墓は、決して数は多くはなく、そこに性格の変化が窺えるのであるが、問題が多岐にわたるために、支石墓の年代について付言して、稿をとじることしよう。

日本の初期支石墓は、碁盤型だけでなく大鳳洞型の支石墓も存在する。しかしいずれも夜臼式<sup>(5)</sup>板付Ⅰ式の段階のものであり、今日両者を時間的に差をつけることはできない。このことは朝鮮に於て大鳳洞型から碁盤型支石墓へ変化してゆく境の段階に、日本に招来されたものであることを意味しよう。有光教一氏の磨製石劍の編年によるBⅠ式↓BⅡ式の変期である<sup>(6)</sup>。朝鮮における細形銅劍の出現が紀元前四世紀の後半にあったとする説によると、有柄式磨製石劍の最初である籬柄式<sup>(7)</sup>のものは紀元前四世紀の末か三世紀に置くことができる。一方金海式灰陶の段階になると鉄劍型石劍が出現することから、有柄式磨製石劍は紀元前に位置づけられよう、すると有柄二段柄式の石劍と有柄無段柄式の変わりめは紀元前二世紀におくことが最も妥当な年代であるといえよう。こうした年代観は弥生時代の開始時期と一致する。

本文を草するにあたり、緒方勉、後藤直、佐藤伸二、下條信行、正林護、古田正隆の諸氏の御教示にあずかることが多かった。記して謝意を表する。また図版の作成にあたって柴尾俊介、村田多津江、増喜緑子の各氏の手をわずらわせた。

註

- (1) W. Gowland "The Dolmens and Burial Mounds in Japan." Archaeologia Vol. 55, 1897.
- (2) 鳥居龍藏「日本内地に純粹のドルメンありや」(『人類学雑誌』第32巻6号)大正6年、東京、他。
- (3) 島田貞彦・梅原末治『筑前須玖先史時代遺跡の研究』昭和五年 京都。
- (4) 鏡山猛「原始箱式棺の姿相(二)」(『史叢』27輯、昭和一七年、福岡)。
- (5) 文化財保護委員会『志登支石墓群』昭和三年、東京。
- (6) 松尾楯作『北九州支石墓の研究』昭和三年、佐賀。
- (7) 森貞次郎「弥生文化形成期の支石墓」(『金載元博士回甲記念論集』)一九六九年、ソウル。
- (8) 下條信行「韓から飛んできた石」(森貞次郎編『北部九州の古代文化』)昭和五年、東京。
- (9) 鳥居龍藏「平安南道黄海道古蹟調査報告」(『朝鮮總督府大正五年度古蹟調査報告』)、一九一七年。
- (10) 榎本龜生「大邱に於けるドルメンの調査」(『歴史公論』60巻8号)昭和十二年、東京。
- (11) 三上次男『滿鮮原始墳墓の研究』昭和三六年、東京。
- (12) 甲元真之「朝鮮支石墓の編年」(『朝鮮字報』第66輯)、昭和四八年、天理。
- (13) 甲元真之「東北アジアの磨製石劍」(『古代文化』第25巻4号)、昭和四八年、京都。
- (14) 註(5)に同じ。
- (15) 註(6)に同じ。
- (16) 註(7)に同じ。
- (17) 註(7)に同じ。
- (18) 諫早市教育委員会『風觀岳支石墓群調査報告書』昭和五一年、諫早。
- (19) 大野台遺跡調査団「大野台遺跡—縄文晩期墳墓群の調査」(『古文化談叢第1集』、昭和四九年、北九州)。
- (20) 註(7)に同じ。
- (21) 長崎県教育委員会『里田原遺跡』、昭和五一年、長崎。
- (22) 註(18)に同じ。
- (23) 正林護「小長井町の先史・古代」(『小長井町郷土誌』)昭和五一年、長崎県小長井。
- (24) 註(5)、(6)、(7)及び、古田正隆「重要遺跡の発見から崩壊までの記録」昭和四九年、島原。
- (25) 註(6)に同じ。
- (26) 註(6)に同じ。
- (27) 大牟田市教育委員会『羽山台遺跡』、昭和五〇年、大牟田。
- (28) 註(6)に同じ。

- (29) 註(6)に同じ。
- (30) 註(7)に同じ。
- (31) 原田大六「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」(『考古学雑誌』第38卷4号)、昭和二十七年、東京。
- (32) 坂本経堯『藤尾支石墓群』、昭和三四年、熊本県旭志。
- (33) 註(6)及び田添夏喜『年ノ神遺跡調査報告』、昭和四四年、熊本県岱明。
- (34) 註(6)に同じ。
- (35) 註(7)に同じ。
- (36) 註(7)に同じ。
- (37) 森貞次郎「北九州の弥生文化」(『日本古代史の旅、縄文・弥生』)、昭和五〇年、東京。
- (38) 註(6)に同じ。
- (39) 註(5)に同じ。
- (40) 註(7)に同じ。
- (41) 金戴元・尹武炳『韓国支石墓研究』、一九六七年、ソウル。
- (42) 有光教一『朝鮮磨製石剣の研究』、昭和三四年、京都。